歌垣の紫衣と山藍摺り

畠山篤

1　歌垣の紫衣

◎男の紫染めによる口説き　海石榴市（奈良県桜井市）で行われた歌垣で、次の問答歌が交わされている。

紫は　灰さすものぞ　海石榴市の　八十の衢に　逢へる児や誰
（十二―3101）

たらちねの　母が呼ぶ名を　申さめど　道行き人を　誰と知りてか
（十二―3102、問答歌）

問歌の上二句「紫は灰さすものぞ」は、色の褪せるのを防ぐとともに色を鮮やかにするために紫根から採取した染料に「海石榴」＝椿の灰を入れることから、「海石榴市」に懸かる序詞・修辞になっている。すなわち上二句は、紫を染めるとき媒染として海石榴の灰を「指す」（注ぐ）と色が鮮やかに出る、という紫染めの生産叙事になっている。

また、「紫」を女に「灰」を男に譬え、女は男に逢うものだという譬喩にもなっている。すなわち紫＝女は、灰＝男に遭うことによって色美しく輝くものだ、といっている。「ものぞ」には断定の口調があり、強い口説きの調子がある。

この上二句を踏まえ、下三句で「海石榴市の八十の衢に逢」った娘に「誰」とその名前を尋ねた。いわれるように女性に名前を尋ねることは、求愛行為だった。

◎「紫の色に出づ」の言い換え　しかし、今まで挙げた「紫の色に出づ」の類句、例えば「紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり」（三―395）と「紫の我が下紐の色に出でず恋ひかも痩せむ」（十二―2976）から類推して、上二句「紫は灰さすものぞ」の本来の標準的な表現は「紫の色に出づべし」だ、とも考えられる。すなわち、紫は海石榴の灰を入れると鮮やかな色が出る。それで、この紫根染めの生産過程に必要な「海石榴」と地名の「海石榴市」との語呂合わせに縁をえて、恋情表現の常套句「紫の色に出づ」＋当然の「べし」（秘めた恋心を態度に出すものぞの意）が、「紫は灰指すものぞ」という気の利いた口説き文句に作り変えられたろう。

そしてこの愛の殺し文句を強力な根拠にして、畳み掛けるようにして下三句で女の名を尋ね、求愛している。

◎女の撥ねつけ歌　これに対して女が、答歌でこれを巧みに撥ねつけている。上三句は男の論理に従って本名を申し上げよう（男の意のままになる）と下手に出ながらも、下二句では通りすがりの男の名前が分からない（とても男の意に添えない）、と高姿勢に転じている。すなわち相手に名前を尋ねるなら、まず自らの名前（素姓）を明かすのが常識だろう、と突き返している。

一見するとこの問答歌は一対の男女の掛け合いのように見えるものの、その実態は海石榴市の歌垣で男組と女組が歌を掛け合った典型的な恋歌、テーマソングだったろう。

◎歌垣の紫衣　海石榴市の歌垣に恋衣の紫染めを持ち出したのは、紫根染めに必要な「海石榴」と地名の「海石榴市」の語呂合わせからだけではなかろう。歌垣の場で恋衣として紫衣などを毎年着続け、その

恋衣の準備段階として見事な紫を染め出す生産過程を経験し、熟知していたからでもある。このように、歌垣の恋の場に最高級の紫根染めを着た男女がいたことを想定することで、本格的な紫根染めの生産叙事を踏まえた「紫は灰指すものそ」の発想とその意味がよりよく理解できる。

2　歌垣の紐・帯

◎歌垣で結んだ紐　次の歌は、海石榴市の歌垣を思い出して詠んでいる。

海石榴市の　八十の衢に　立ち平し　結びし紐を　解かまく惜しも
（十二―2951、正に心緒を述ぶる）

海石榴市の歌垣で地を踏み平し、結んだ紐を今解くのは惜しい、と述べている。ここの「結びし紐」は、歌垣で愛を交わした相手が結んだものである。今は別の相手と交際し、その紐を解こうとしている。

この「紐」はどのようなものだろうか。恋衣の「紫の我が下紐」（十二―2976）や「紫の帯の結び」（十二―2974）が恋の現場にあるので、この歌垣で愛を込めて結んだ「紐」もまた、紫染めなどの恋衣だったろう。

◎歌垣の御帯の倭文服　海石榴市は、武烈前紀では「海柘榴市」とも表記されている。この海柘榴市の歌垣は、武烈前紀で影媛をめぐる鮪の臣と太子（後の武烈天皇）の恋の鞘当ての舞台になっている。そこで、太子が影媛に求愛の歌を歌うと、鮪の臣が愛人の影媛に代わって次の歌を返し、太子を拒絶している。

大君の　御帯の倭文服　結び垂れ、誰やし人も　相思はなくに。
（紀歌謡93、武烈前紀）

大君（太子）が「御帯の倭文服」を結び垂たれている、そのタレではないが、誰かこれという特定の人のことを相思っていない、と述べている。この歌を鮪が影媛に代わって述べているので、あの方（鮪の臣）以外の誰という人のことも相思っていない、と影媛が述べたことになる。この歌は、歌垣における女の撥ねつけ歌の典型である。

「倭文服」は、日本古来の簡単な模様のある織物である。上三句「大君の御帯の倭文服結び垂れ」は「誰」を導く序詞になっている。これは単なる語呂合わせでなく、実際に「大君」＝太子が歌垣で恋衣の「御帯の倭文服」を結び垂れていたところから、「誰」を導いているだろう。すなわち、上三句は「誰」を導く有心の序詞である。

このように海石（柘）榴市の歌垣に登場する「御帯の倭文服」は、同じ歌垣に登場する紫衣と同一位相にあり、恋衣になっている。

◎倭文機帯・狭織の帯　「大君の御帯の倭文服」の歌（紀歌謡93）の類歌として、次の歌がある。

古の　倭文機帯を　結び垂れ　誰といふ人も　君にはまさじ
（十一―2628、物に寄せて思ひを陳ぶる）

一書の歌に曰く、「古の　狭織の帯を　結び垂れ　誰しの人も　君にはまさじ」

「古の倭文機帯（狭織の帯）」を結び垂れている、そのタレではないが、誰という人もあなたには及ばないだろう、と述べている。「君」の纏っている「倭文機帯（狭織の帯）」も、恋衣の一類である。この歌は「大君の御帯の倭文服」の歌（紀歌謡93）の類歌であるものの、その主題は正反対で、男の愛を受け容れている。

◎歌垣の歌と妻訪いの歌　このように、恋の現場を示すほぼ同じ上三句を用いて、相手を拒絶もすれば、受け容れもしている。すなわち、この有心の序詞は応用の効く典型的な恋詞になっている。こうしてみると、「大君の御帯の倭文服」の歌（紀歌謡93）と「古の倭文機帯（狭織の帯）」の歌（十一―2628）は、歌垣の歌としても妻訪いの

歌としても通用するものである。「古の倭文機帯（狭織の帯）」の歌（十一―2628）に異伝・バリアントがあるのは、この類の歌がとても愛唱されていたことを示していよう。

3　歌垣の山藍摺り

◎歌垣の小忌衣　『続日本紀』によると、称徳天皇の宝亀元年（七七〇）三月辛卯の日（二十八日）に歌垣が執り行われた。それに参加した男女の装束とそこで歌われた歌は、次のとおりだった。

其の服は並びに青摺の細布の衣を着、紅の長紐を垂れ、男女相並びて、行を分けて徐むろに進む。歌ひて曰はく、

乙女らに　男立ち添ひ　踏み平す　西の都は　萬代の宮

（続日本紀歌謡6、続日本紀・宝亀元年三月の条）

この歌垣は、民間の歌垣に中国の踏歌が合流して宮廷化したものである。この歌垣では、「紅の長紐」を垂らし、「青摺の細布の衣」を着ている。祭場の「西の都」（河内の由義の宮）で「踏み平らす」が「海石榴市の八十の衢に立ち平し」（十二―2951）に共通し、歌垣は男女が並んで行列を組んで大地を踏む要素を持っていた。歌垣は元々神事なので、「紅の長紐を垂れ」た「青摺の衣」を小忌衣にしていた。

この「紅の長紐」をつけた「青摺衣」が朝廷の小忌衣であることは、例えば『延喜式』縫殿寮の条に新嘗祭の小斎諸司の服の材料として「青摺布衫三百十二領、緋紐料四丈、眼布六端一丈二尺、山藍五十四囲半、模飯料二斗四升八勺」と記されていることからわかる。眼布は「さよみぬの」と読み、細い麻糸で織ったという。「青摺衣」の料は山藍（トウダイクサ科の多年草）であり、「模飯料」は山藍を型摺りするための飯の料である。

◎古事記の紅の紐と青摺の衣　この紅の紐と山藍の青摺の衣という組み合わせは、朝廷の小忌衣・神衣として伝統久しいものである。このことは、仁徳記の筒木宮の石之日売皇后の条、ならびに雄略記の葛城の一言主之大神の条に示されている。記伝はこの二つの条の小忌衣・神衣について夥しい用例を挙げ、「神事には古の随、伝へて後まで、大嘗・新嘗及賀茂臨時祭などには定まりて、摺衣を用ひらる」と説いている。

民間の歌垣・頭の遊びでは、参加した娘子が山藍摺りの衣＝青摺の衣を着てはいるものの、紅の長紐を垂らしていなかった（後述）。これに対して、宝亀元年（七七〇）に朝廷の催した歌垣では、参加した男女が青（山藍）摺りの衣を着て、それに紅の長紐を垂らしていた。

してみると小忌衣が朝廷のものか民間のものかは、これに付随する紅の紐の有無によって区別していたかもしれない。そして現に『延喜式』大嘗祭式によると、紅の長紐は五位以上のものが青摺りの衣に垂らす定めになっている。

◎鳥名子舞の小忌衣　「皇太神宮年中行事」の「六月十七日祭使參宮之間鳥名子舞歌」に、小忌衣の「紫帯」が次のように述べられている。「鳥名子」は童男童女の舞い手で、「となこ」と読む。

いよよとぞ言ふ　君が代は　千代とぞ言ふ
千代とぞ言ふ　紫帯をぞ垂れ　いざや遊ばむ

（雑歌―50、皇太神宮年中行事）

歌意は、君が代の弥栄を寿ぐように、雛鳥＝鳥名子がチヨチヨ（千代千代）と鳴いてめでたい、舞い手の鳥名子は紫の帯を垂らしてさあ神遊びをしよう、ということだろう。

『古代歌謡集』の「紫の帯」の注によると、「鳥名子たちが紫の帯を結び垂れたものらしい。鳥名子の衣裳が青摺りのものであったことは太神宮式に見えるけれど、帯のことはわからない。しかし、青摺りとの配合からいって、紫の帯は自然である」。確かに『延喜式』巻四・

神祇四・伊勢太神宮によると、伊勢神宮の主な儀式の直会で「鳥子名（ママ）儛童男童女十八人装束。青摺衣裳在レ前摺備。臨レ祭給レ之」とある。こうしてみるとこの「紫帯」は、小忌衣の「青摺衣」＝山藍摺りと同じ位相にあることになる。

◎小忌衣・恋衣としての紫衣　以上から、民間の「海石榴市」の市神の祭りとして定期的に執り行われる春秋の歌垣で参加者が着ただろう恋衣・紫根染めも、「青摺衣」＝山藍摺りと同じ小忌衣だったとわかる。

4　筑波山の歌垣

◎筑波山の歌垣　『常陸国風土記』は、筑波山の歌垣の状況をかなり具体的に示している。

それ筑波岳は、高く雲に秀で、最頂は西の峯峰しく嶮く、雄の神と謂ひて登臨らしめず。唯、東の峯は四方磐石にして、昇り降りは峡しく屹てるも、其の側に泉流れて冬も夏も絶えず。坂より東の諸国の男女、春の花の開くる時、秋の葉の黄づる節、相携ひ駢闐り、飲食を齎賚て、騎にも歩にも登臨り、遊樂しみ栖遅ぶ。其の唱にいはく、

筑波峰に　逢はむと　言ひし子は　誰が言聞けばか　み寝逢はずけむ
（風土記歌謡２）

筑波峰に　廬りて　妻なしに　我が寝む夜ろは　早も明けぬかも
（風土記歌謡３）

詠へる歌甚多くして載車るに勝へず。俗の諺にいはく、筑波峯の會に娉の財を得ざれば、兒女とせずといへり。

（常陸国風土記・筑波の郡の条）

筑波山は男女の神を祀る神山で、とくに男神を祀る山は険しい。春秋の祭りの折に坂＝足柄山より東の関東諸国の男女が手を携えてこの山に集い、歌垣を催したという。そこで歌われる恋の歌は、記載できないほど多いという。そしてこの地方には、「筑波山の歌垣で男から妻問いのしるしとして財物を貰わない娘は娘扱いをしない」という諺があるという。

◎春秋の神祭り　歌垣は春秋の神祭り（春は国見儀礼）に付随しているので、その祭りの構成員の信じる神（筑波山の神）が祭場に来臨し、その集団の最高神女が「一夜妻」として接待している、と考えられる。そして、参加者もその神と神女の分身として歌を交わし、夜に気に入った相手と愛を語り合っていた。

◎恋の不幸のあほらしさ　「筑波峰に」の二首の歌（風土記歌謡２・３）は、この歌垣で歌われた代表的な歌である。この二首の歌は、歌垣の夜の男女和合の場で一夜の妻にあぶれた男の独詠歌の体裁をとっている。しかし、『古代歌謡論』〔土橋寛、一九七一、一六七・一六八頁〕によると、このような惨めな体験をした男（個人）が嘆いているのではなく、恋の不幸のあほらしさを歌うものである。すなわち、「じつはすべての男女が結びついているか、結びつく運命にあるからこそ、こうした恋の不幸が笑いの素材にされうるし、またされやすい」。そしてこのあり方は、このような間抜け男にならないようにと戒めるところにある。

◎娉の財　このようにすべての男女が結びつく運命にあったからこそ、親は「筑波峯の會に娉の財を得ざれば、兒女とせず」ということになる。これほどに目配りされたなかにあって男から妻問いのしるしを得ていない娘は、結婚が絶望的で、親（とくに母親）はこれをとても不甲斐なく思ったろう。またこの諺には、娘を結婚にむけて発奮させる意図も籠められていたろう。

◎虫麻呂の嬥歌会の歌　高橋虫麻呂の詠んだ次の歌からも、筑波山の歌垣の状況が知られる。

筑波嶺に登りて嬥歌会を為る日に作る歌一首　并せて短歌

鷲の住む　筑波の山の　裳羽服津の　その津の上に　率ひて
娘子壮士の　行き集ひ　かがふ嬥歌に　人妻に　我も交はらむ
我が妻に　人も言問へ　この山を　うしはく神の　昔より　禁め
ぬ行事ぞ　今日のみは　めぐしもな見そ　事も咎むな　嬥歌は、東
の俗の語にかがひといふ　（九―1759）

反　歌

男神に　雲立ち登り　しぐれ降り　濡れ通るとも　我帰らめや
（九―1760、雑歌）

右の件の歌は、高橋連虫麻呂の歌集の中に出づ。

◎愛の交歓　この時の「嬥歌会」＝歌垣は「しぐれ降り」とあるので、秋の神行事に付随した催しだった。この嬥歌会＝歌垣では日常の規範が取り払われ、相手が「人妻」であっても「神の昔より禁めぬ」ことだった。そして、愛の交歓があまり楽しいので時雨が降って濡れ通っても帰りはしない、と反歌で述べている。虫麻呂はこの東国の歌垣に参加し、何の違和感もなくその世界に溶け込んでいる。

◎釵し人の面・家　筑波山の歌垣での歌とは限定できないものの、歌垣では次のような教訓歌も歌われていた。

小林に　我を引き入て　釵し人の　面も知らず　家も知らずも。
（紀歌謡111、皇極紀三年六月、童謡）

この歌謡は、大化元年（六四五）の蘇我氏滅亡の兆し（前兆）として皇極紀三年（六四四）六月の条に記された童謡である。しかしその実体は『古代歌謡全注釈―日本書紀編―』〔土橋、一九七六、三四二・三四三頁〕が説くように、歌垣で指導的地位にある年寄り株の老女が歌った教訓歌である。この歌の意味は、林の中に私を誘い込んで「釵し人」の顔も家も知らない、ということである。この歌はこのような間抜け女自身によって歌われたものではなく、このような間抜け女を見本にしてそれを笑うことによってこのようにならないように戒めている。そのあり方は、筑波山の歌垣で「逢はむと言ひし子」に見捨てられて一夜の「妻なしに」夜を過ごす間抜け男を歌うこと（風土記歌謡2・3）と同じである。

交際する男の「家」や「面」を「知る」ことは、その家柄・素姓を確かめることだった。これは恋する女の最低の心得だった。前述した海石榴市の歌垣の問答歌（十二―3101・3102）にあるように、そもそも愛する男女が交際するにあたって事前に家柄・名前を告げ合うのが歌垣の掟・約束だった。そしてその相手の素姓の確認が、娉の財を手にすることに繋がっただろう。こうして娘は、確かな愛と幸せを獲得しただろう。

5　頭の遊びの山藍摺り

◎頭の遊びと山藍摺り　このような神祭りとしての歌垣では、前述したように「青摺りの衣」＝「山藍摺りの衣」が小忌衣として用いられ、その「山藍摺り」の延長線上の「紫の衣」が恋衣として用いられていた。

そして、この歌垣と同類の行事として頭の遊び・小集楽があり、そこでも「しなでる片足羽川の」の歌（九―1743）にあるように参会者（神女か）は小忌衣の「山藍摺りの衣」を着ており、その衣は「紅」の衣とともに恋情で染め上げられている。

◎打橋の頭の遊び　まず「頭の遊び」から述べる。この頭の遊びでは、次のように歌われている。

打橋の　頭の遊びに　出でませ子。玉手の家の　八重子の刀自。
出でましの　悔いはあらじぞ、出でませ子。玉手の家の　八重子の刀自。
（紀歌謡124、天智紀九年五月、童謡）

この歌謡は、天智九年（六七〇）四月の法隆寺炎上の兆し（後兆）の童謡として記されている。しかしその実体は『古代歌謡全注釈―日

本書紀編―』〔三七一頁〕が説くように、打橋の頭（川瀬に板を渡した仮の橋の袂）で行われた歌垣での独立歌謡である。

この頭の遊びにも、性的解放が伴っていた。「玉手」は大和国の南葛城郡掖上村（現奈良県御所市掖上）の玉手で、その東に曽我川、西に葛城川が流れている。ここには、「打橋の頭の遊び」をする条件が整っている。そこで歌われた歌は、「打橋の頭の遊びに出でませ子」と娘たちに呼びかけている。これは、娘たちに参集を呼びかける歌垣の一般的な誘いの文句である。また特に名指しして呼びかけられている「玉手の家の八重子の刀自」は、その玉手にある大きな屋敷の美人の奥さんである。このような女性は、頭の遊びに集まる庶民階級の娘たちよりも身分も年齢も一段上位の女性であり、遊びに参加するはずもない者である。こうしてみるとこの歌の意図は、娘たちに参集を呼びかける一方で、参加しそうにない大家の美人の奥さんにも参集を呼びかけ、遊びに参列している人たちのレベルに引き下ろしてからかい、結局のところ庶民階級の仲間意識を高めることにある。

◎**小集楽**　小集楽は頭の遊びと同じで、小集楽の語構成もこの「頭の遊び」の「頭」に接頭語の「小」がついただけのものである。この年中行事が小規模だったことから、「小集楽」の字を当てたものだろう。次の万葉歌は、この小集楽で歌われたものである。

住吉の　小集楽に出でて　現にも　己妻すらを　鏡と見つも

右、伝へて云はく、昔鄙人あり。姓名未だ詳かならず。ここに郷里の男女、衆集ひて野遊す。その会集へるが中に鄙人の夫婦あり。その婦容姿端正しきこと、衆諸に秀れたり。すなはちその鄙人の意に、弥妻を愛しぶる情を増す。すなはちこの歌を作り、美貌を讃嘆す、といふ。

（十六―3808、有由縁并せて雑歌）

河内国の住吉の頭（橋の袂）で催された小集楽は、「野遊」とも言い換えられている。この行事に田舎のある夫婦が参列したところ、その夫は妻が飛び切りの美人であることに気づき、いよいよ妻を愛してこの歌を歌ったという。

これは自分の妻の魅力を讃美する歌である。夫婦であっても交際相手を変える小集楽にあって、その真逆をいくこのお惚気は、小集楽の場を笑いで包んだことだろう。

◎**催馬楽の竹河**　この頭の遊び・小集楽は、催馬楽でも次のように歌われている。

竹河の　橋のつめなるや　橋のつめなるや　花園に　はれ
花園に　我をば放てや　我をば放てや　少女伴へて

（催馬楽35、竹河）

『催馬楽研究』〔藤原茂樹、二〇一一〕が挙げる古注釈によると、「竹河」は伊勢国多気郡斎宮にある多気川だといわれている。この他に河内国、大和国にある川だともいわれている。「花園」は川の傍らにある祭場の地名とも、花々が生えている祭場とも、比喩としての恋の花園とも理解できる。

この「竹河の橋の頭」にある「花園」でも、頭の遊び・小集楽が行われていた。そして意気盛んな若者が、妙齢の少女を連れてこの遊びに参加したい、と述べている。

この歌謡には歌垣での初々しい恋を述べる一般性があるので、地名の竹河を頭の遊び・小集楽の催される地域の川の名に変えさえすれば、全国のどこでも通用するものである。

◎**河内の大橋の頭の遊び**　そして河内国の大橋の頭（袂）でも同様の歌垣が行われ、その様子が高橋虫麻呂によって次のように歌われている。

河内の大橋を独り行く娘子を見る歌一首并せて短歌

しなでる　片足羽川の　さ丹塗りの　大橋の上ゆ　紅の　赤裳裾

引き　山藍もち　摺れる衣着て　ただひとり　い渡らす児は　若草の　夫かあるらむ　檀の実の　ひとりか寝らむ　問はまくの欲しき我妹が　家の知らなく　（九―1742）

反歌

大橋の　頭に家あらば　ま悲しく　ひとり行く児に　宿貸さましを　（九―1743、雑歌、高橋連虫麻呂の歌集の中に出づ）

「片足羽川」は、別に大和川とも石川ともいう。「河内の大橋」はそこにかかる大橋で、大阪府柏原市あたりにあるという。この大橋は「さ丹塗」されている。当時、頭の遊びをした打橋（川瀬に板を渡した仮の橋）、継橋（橋板を継いだ橋）、石橋（自然石を飛び伝って渡る橋）が普通だった。これに対して河内国には大陸からの渡来人が多く住んでいたので、その高度な技術によって大掛かりな橋が作られ、その橋には異国風の丹塗りが施されていた。

頭の遊びが、この丹塗りの大橋の袂でも行われた。そしてこの橋の上を、娘子が山藍摺りの衣を着て紅の赤裳の裾を引きながら渡っている。作者＝虫麻呂はこの娘子に想いを掛け、「若草の夫かあるらむ」（この娘子に頭の遊びの一夜の夫がいるのだろうか）、「檀の実のひとりか寝らむ」（この娘子が頭の遊びで一人寝するのだろうか）と思い、「問はまくの欲しき我妹が家の知らなく」（愛のことばをかけたい我が恋人ではあるけれどもその家柄・素姓を知らない）、と述べる。そして反歌で、できればこの娘子に求愛し、大橋の頭（袂）に自分の家があればそこに宿を取って一夜を共にしたいけれども、その家がないので何もできない、と述べる。

長歌で述べる「家」は、家柄・素姓を意味するのに対して、反歌で述べる「大橋の頭」の「家」は、この頭の遊びで成立したカップルが一夜を共にする仮の宿である。このように、この二首からこの頭の遊びの場がかなり再現できる。

◎紅染めと山藍摺り　この橋頭の遊びに参列している娘子の着る衣には、時代の新旧がある。娘子が腰に佩く紅の赤裳は、大陸渡来の高度な染衣である。「紅＝くれなゐ」の語源自体が「呉（くれ・中国南部）の藍（あゐ）」で、渡来人が将来した染料である。そして万葉歌では、この紅の赤裳の裾を引く女人が恋情を漂わせながら数多く詠まれている。この紅の衣は、丹塗りの大橋とともに新層の文化である。

これに対して彼女が上半身に着る山藍摺りの衣は、前述したように在来の原始的な小忌衣である。そして万葉歌でこの「山藍摺りの衣」を着る女人を詠む歌は、この一首だけである。

このようにここには、世俗的な紅染めと神事性の強い神衣の山藍摺りが重層している。そしてこの二つの色衣は、この頭の遊びに参列した魅力あふれる女人がこれらを身に纏うことによって、恋情で染め上げられている。すなわちこの橋を行く女人は、半分は恋のおしゃれとして新層の異国風の衣を装い、もう半分はこの神事に参会する印として古層の小忌衣を着用し、その結果どちらの色衣も恋衣になっている。

万葉の恋歌には、恋する男女の愛した色彩豊かな恋衣を踏まえた歌がたくさんある。そのなかにあってただ一首だけ、この頭の遊びで（新層の赤裳を伴いつつ）古風な小忌衣＝山藍摺りを着た「娘子」が一人で祭場の橋の上を歩くという歌があり、異彩を放っている。すべての男女が結びつく運命にある頭の遊びの中にあって、「娘子」が異界との境である橋の上を「ただ一人い渡らす」のは、確かに際立つ光景である。

これはもしかしたら、この頭の遊びの神事の場を歌っているのかもしれない。すなわちこの山藍摺りの小忌衣を着た娘子とは最高神女で、川上から来訪する神の嫁になるべき人物かもしれない。この「娘子」＝「兒」に敬語の「す」を用いているのも、最高神女への敬意を示しているのかもしれない。そうだとすると、虫麻呂は神の嫁に恋したこ

とになり、元より叶えられない恋をしていることになる。

以上、橋の袂（頭）の遊びが虫麻呂の鋭敏な色彩感覚によって掬いあげられ、とくに山藍摺りの衣がその本来あるべき神遊びのなかで鮮やかに描かれているのは、僥倖である。

◎紅は山藍の延長　「山藍」と「紅」はかなり色相が異なるのに、「あゐ」を共有し、同じ神祭りで着用されている。こうしてみると大陸渡来の「紅＝呉の藍」は、前述の「紫」と同様に日本の伝統久しい「山藍」の延長線上にあることを示していよう。

◎虫麻呂の孤独　『万葉集』〔中西進、一九七六、二二二頁〕が指摘するように、虫麻呂の歌の特徴としてこの他に「独り」と「見る」がある。この歌には、題詞を含めて「独り」が四回も用いられている。この「独り」は娘子の独りを表しているけれども、それは作者の孤独の反映だろう。そしてこの作者の「独り」は題詞の「見る」に通じ、彼は独りぼっちの娘子を見つめるだけで、決して娘子に声を掛けて求愛していない。「ひとり行く児に宿貸さましを」と反実仮想の「まし」を用いているのは、この場での彼が行動の人・愛の狩人でないことを明示している。ましてやもしもこの娘子が最高神女だとすると、神の嫁になる娘子は一般の男性の恋の対象にはなりえなかった。

この作者の独特な静寂な視点・フィルターは、この頭の遊び・歌垣の賑わいの対極にある。この歌垣は前述したように「出でませ児」と伴侶になる乙女を誘い（紀歌謡124）、恋人の「少女偶」えて参列し（催馬楽35・竹河）、夫婦で参列して（十六―3808）、夫婦でも交際相手を変える（九―1759）というものだった。このように歌垣は、好ましい男女の組み合わせを即席で作り上げる熱気にあふれている。

しかし虫麻呂はこの愛の祭典の興奮の渦中にいながら、いな渦中にいればいるほど、その「独り」は研ぎ澄まされて静寂になり、山藍・紅・丹という色彩を帯びた「見る」だけの視覚の世界に沈潜している。

この虫麻呂の歌には共同体のもつ一体感がどこにも見られず、共同体を代表する神女を思わせる橋上の「娘子」すら「ま悲しく一人行く兒」と一人の孤独な乙女にされている。東国の筑波山の歌垣で虫麻呂が歌った「鷲の住む筑波の山の」の歌（九―1759）とその反歌「男神の」の歌（1760）で発揮された熱気は、この関西の歌垣ではまるで見られない。

テキスト

青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸　『続日本紀 四』　岩波書店
秋本吉郎　一九六八　『風土記』　岩波書店
荻原浅男・鴻巣隼雄　一九七九　『古事記 上代歌謡』　小学館
小島憲之・木下正俊・佐竹昭広　一九七一　『萬葉集 一』小学館
一九七二　『萬葉集 二』小学館
一九七九　『萬葉集 三』小学館
一九七六　『萬葉集 四』小学館
土橋　寛　一九七六　『古代歌謡全注釈―日本書紀編―』　角川書店
一九八九　『古代歌謡全注釈―古事記編―』　角川書店
土橋寛・小西甚一　一九六八　『古代歌謡集』　岩波書店

引用文献・参照文献

西郷信綱　一九八九　『古事記注釈 第四巻』　平凡社
土橋　寛　一九七一　『古代歌謡論』　三一書房
中西　進　一九七六　『万葉集』　角川書店
畠山　篤　二〇一〇　『万葉の紫の発想―恋衣の系譜―』　アーツアンドクラフツ
藤原茂樹　二〇一一　『催馬楽研究』　笠間書院